

## 「ジュンペンダント」

「それじゃマジヨリカ、行ってきまアす」

黄色い見習い服がほうきをもって歩いて行くのを、わしはララと一緒に見送っていたんじや。

「気をつけて行くんじやぞ」

どれみたちがまた魔女見習いになって何ヶ月か経つとるし、最初は苦笑いで眺めていた大きな見習い服も、4人めともなると見慣れてきたな。

しかしまさか、ももまで帰ってくるとはのお。まあ、縁えんというのはそのいうものかもしれんが。それにしても、挨拶あいさつなしでいきなり高校訪問か。どれみもずいぶん驚おどろくじやろ

「……いいっ？見習い服で行くじやと!?!」

「このほうが早いシ、わたしだ、ってすぐわかつてくれるヨ。どれみちゃんなら」

くるつと振り返ったももがそう言った。ま、まあ、

そうかもしれんがな　おおっと、忘れとった。

「もも、出かける前にひとつ、いいかの?」

「へ?なにナニ?」

近づいてきたももを連れて、わしは店の奥まで歩いていって、

「このペンダントなんじやがな」

飾つてあるものを指差すと、ももが後ろから覗き込んできた。奇妙な顔でな。

「うんと　ハート、カナ?このペンダント。ひょっとして、どれみちゃんを作ったノ?」

さすがに濃い付き合いだっただけあるのお。この形をハートとわかるとは。

「んむ。どれみたちがな、せつかくまた魔法のアクセサリーが作れるようになったのなら、まずは自分たち全員が世話になつた人のために作りたい、そう言つて作つておつたものじや。裏にひとりづつ、名前を彫つてな」

「Yes! じや、もももやるヨお」

### 3 こころペンダント

にこつと笑ってペンダントをとったももが、裏を返して額うなずいたわい。察さすしいのお。モンローさまのただひとりひとりの弟子、いまだ健在、か。

ペンダントに名前を彫うっているももを眺めながら、わしはそう思おもったんじや。

\*\*\*\*\*

ももがどれみたちの学校に飛んでいって、しばらくした頃。わしとララでは商売しょうばいにならんから、準備中札を出して新聞でも読んでたのじやが、

「こんにちは〜」

カランカラン、とカウベルの音と一緒に、人の気配が入いってきおった。

「なんじや、まだ準備中じやぞ。札はに書いておるじやろうが」

まったく。昔むかしみたいに必要な人しか寄れない魔法でもかけておけばよかつたかの。

「はい。なので、お邪魔まじまじに來ました」

「なんじやとお？ って、な〜」

そこに立たつてたのは、若い女性おんなじやつた。

見覚えみおぼがあるぞ。たしか、関先生せきせんせいとか言いつたか。

「なんじや、教師きょうしが。また学校がっこうは終わおつとらん時間じかんじやるうが。サボさぼつたとも言いつのか？」

「はい。マジヨリカさん」

にこつと笑わらってそう言いつたのを聞いて、わしの動きが止とまった。目の前まへの笑顔えんごをじつと見みながら、少しでも口くちを動かうごかさんと！

「な、なんのことじやな？ うちうちは、巻機山まきはたやまじやぞ」

「とりあえず、いまだけはいいんですよ。マジヨリカ」

そうしたら、なんとかしらばつくれたわしの声こゑの向むかうから、また聞いたことのある声こゑが響ひびいてきたんじや。こ、この声こゑは

「じよ、女王様女王様!？」

服装ふくそうは白いワンピースワンピースじやが、間違まちがいない。女王様女王様が、なんでじや？ ここをスイートハウススイートハウスにするため

に、魔女界からおいでになるとは聞いておるが、それは今日の夜だったはずじゃ

「あはは。いまだに効果てきめんだなあ、ゆき女王様」  
 そう言つて笑う関先生の横つ腹を、女王様が肘で突付けておる なんじゃと!?

「ちよ、ちよつと待つたあ！女王様、まさか、関先生に？」

「魔女のことを、女王様みずから教えた、じゃと？そんなこと、あるはずが

「ええ。というより、見破られちゃったんですけどね」  
 あつた。

わしは思わず、へたり込んでしまったわい。たまたまイスがあつたから、まだマシかもしれんが。

「あれは そう、ハナちゃんが病気になって、ラプシユプリームを取りに行つてもらつたときよ。

どれみちゃんたちみんなが、魔女界に乗り込んでいくことを決意した、その顔色でバレちゃったのよね」  
 「あと、ゆきの様子でね。なにか相当なこと隠して

るな、つて思つて問い詰めたんだ」

イスに座つて というより寄つかかつて聞く声は、天の上で話しておるようじゃ。わかる、それはわかるぞ。あのとときの必死の思いが、この先生に伝わつたというのはな。しかし

「結構たいへんだったのよ。『魔女』つて言わせないために、筆談でやりとりしたりとか、ね」

楽しそうに話しとるけど、こら本当にすごいもんじゃ。

魔女のことを知っているのに、そのあと2年以上も誰にも話さず、ひとりごとにさえしなかつたわけじゃからな でなければ、誰かが魔女ガエルになつてしもつたはずじゃ。

どれみから、人となりは確かによく聞いとる。が、まさかここまでとは うむ。

「正体がバレるのはわかつたわい。まあ、もう魔女ガエルにもならんから構わんしな。  
 それで？わしになんの用じゃ？」

5 こころペンダント

女王様の前じゃが、わしはそっけなく言うてやったわ。そしたら、

「ありがとございます。子供たちを」

目の前の大きな身体が半分になってしまったんじゃ。

「お、おいおい。わしや教師に礼をされる覚えなどない。というか、頭を上げんか。かゆくてたまらんー！」

思わずイスから飛び上がって、関先生の両肩を持ち上げてやったら、真っ直ぐな瞳が上がってきたぞ。

「あなただつて先生でしょう？魔法の師匠なんだから。同じですよ。同じ」

「ふん」

瞳を見て、わしは鼻を鳴らしてしまったわい。ふざけた口調にしておつて、ごまかされると思うなよ。

「同じわけがあるかい！ここで何度お主の名前を聞いたと思う？ももが来た、ハナが来た。学校がらみなら、なにがあるうがお主の名前が出ない日なんぞないわい。」

逆を考えてみい、学校でわしの名前が出るか？出ないじゃろう。もちろん、それでいいんじゃがな」

言っていて、少し強すぎたか、と思つたところで、別の方向から声が聞こえてきた。

「マジヨリカ、そう言わないで。彼女はね、あなたにずっとお礼がしたかったの。もう、魔女ガエルの姿のときからよ。」

今日、ちょうどMAHO堂に寄るから、誘つてみたの。ね、ちゃんと応えてあげて」

言われて、わしもちよつと考えた。この口調、女王様じゃなくて、関先生の友人としての言葉、かなら、

「ま、わたしには関係のないことじゃな」

「マジヨリカー！」

女王様 いや、養護教諭のゆき先生が、わしのことを見つと見つめてきとる。睨むわけでもなく、な。わしはそれを無視して、店の奥からひとつものを手にとつた。

「それより、このハートのペンダントを持っていけ。お主に幸運を呼び込むじゃろう。」

言いながら戻ると、わしはそのまま真っ直ぐ関先生に手ごと突き出したんじや。

「ハート？　　はあ。」

不審がつておるのお。そもそも、ハートには見えんじやろうし、しかたあるまいがな。じゃが、

「ふふふ。信じとらんな？　ここは魔女のいる、本物の魔法のアクセサリーを売る店じゃぞ？」

「いや、でも、あたしはそんな可愛らしいのはどうも苦手です。」

すこし後ずさりしそうな姿に笑いそうになるのを抑えて、わしはペンダントを手ににぎらせた。

「ただの魔法のアイテムでは足りんか。なら　それはどれみたちが揃って、誰かさんの幸運を願いながら作ったもの、と言ったらどうじゃ？」

関先生が、手の中のペンダントをくるり、と裏返す姿を横目で見ながら、わしは続けたんじや。

「それがたとえただの泥細工どろざいくだとしても、お主に効かんわけなからうが。」

あえて目は合わせませんが、気配で十分わかる。ペンダントの裏には、どれみたちの名前と一緒に「関先生へ」と彫つてあるのじゃから。

「あ、あの、これは、おいくらで。」

はあ。またつまらん意地はりおつて。

「今晚からここはスイートハウスじゃ。残しておいてももう売れんわい。どうしてもというても、いままでお主が教師として積んだもので釣りが出るくらいじゃろう。それとな。」

わしはひとつ大きく息を吸つた。背中を向けたい衝動に耐えるのは難しいが、仕方あるまい。

「ありがとう。」

わしは勢いつけて身体をふたつに折つたんじや。

「え？　いや、どれみたちのことなら、あたしも教師ですから、当たり前のことをしただけ。」

## 7 こころペンダント

うむ。そう思うじゃろうな。だが、

「いいや、それだけではない。

ゆき女王様の支えになってくれて、本当にありがとう。それは千の呪文、万の魔力に勝る、ひとのちからじゃ」

しん、となったMAHO堂に、ちいさく女王様がなにかつぶやいたのが聞こえた。意味はわからん。が、最後まで言わねばなるまい。

わしは顔を上げて、関先生の、さつきと同じ、あの真っ直ぐな瞳を見つめたんじゃ。

「わしはそのことを、どれみたちから学んだ。お主が——あなたがどれみたちに教えたことから、な。

あなたは、わしの師でもあるのじゃ。ハートを差し上げるべき相手から礼など、とても受けられんわい」

言った瞬間、わしら3人の先生の手が、自然に重なった。もちろん、魔法なんぞ使っておらんのに、な。

それは本当に、心地よいことじゃな

\*\*\*\*\*

「あれ？ハートのペンダント、なくなっちゃったの？」

「お前の どれみハートのペンダントのことか？  
そうみたいじゃな」

あたしが言った言葉に、マジヨリカがそっけなく返してきたよ。

ももちゃんが学校にやってきた日の放課後、MAHO堂で再会のやりなおしをしたあと。店の奥がちょっと変わったよな気がして、なんだろっ、って思ったんだけどさ、

「みたい、って。あれはあたしたちの大切なものでしょ？アクセサリーショップやめても残しとくって、マジヨリカも言ったじゃない！」

「まあな。じゃが、あれも魔法のアクセサリーじゃ。お前たちが強く願ったせいで、本人に届いたのかもしれんぞ」

「たたく、適当なことばっか言って ても、そっば

向いてそう言ってるマジョリ力見てたら、なんだか  
だんだんそれが本当のような気がしてきたよ。あた  
したち、本当に本気で先生の幸運、願ってたもんね。  
「そっか　ハートだとわかってくれるといいんだ  
けどな」

自分でも思うんだよね。やっぱ形は、はづきちや  
んに作ってもらったほうがよかったかなーって

「——そのくらい、ちゃんとフォローしといたわい」

え？

なんか聞こえた気がしたんだけど　気のせいかな？

—おしまい—